幻想世界魔物大全３

アンデッド

ゾンビ

ゾンビ

危険度：C　　出現場所：墓地、廃墟等
知　能：なし～低い　　特殊能力：なし

ゾンビとは魂の失われた肉体が、魔術や病原体等の作用で動き出した生ける屍である。屍ではあるが腐敗はせず、ほとんどの場合は走尸行肉（そうしこうにく）という言葉を体現するかのように無為に徘徊を続けるが、肉体に記憶された生活習慣を模倣するような行動もみられる。意思や知性は皆無で、言葉を話すことはない。

音や光に敏感で、生者を見つけると容赦なく襲いかかり、自らが失ったあらゆるものを取り戻そうとするかのように、血肉や、知性や、心を比喩で無しに貪ろうとする。ゾンビとなった人間が女である場合、男を組み敷いて、おぞましくも、あの生命を宿らせる儀式を行うこともあるという。その渇いた壺は決して満たされず、死んだ土地に蒔かれた種は芽吹かない。決して手に入らない命を求める虚しい行為が延々と繰り返されるだけである。

行動は単純なため単体ではさほど脅威にならないが、その力は意外なほどに強く、痛みに怯まず怪我や死さえも恐れずに向かってくるため、ゾンビの集団を相手にするのは賢明ではないだろう。

また、死霊術師（ネクロマンサー）と呼ばれる特殊な術者は死者に呪いをかけ、意のままに操ることが出来る。疲れを知らず、賃金も要求しない究極の奴隷は農夫や鉱夫、船の漕ぎ手にうってつけなのである。しかし、ひとたびその鍬やつるはしを剣に持ち換えれば、奴隷は極めて危険で厄介な不死の戦士と化す。一頭の狼に率いられた百頭の羊の群れは、一頭の羊に率いられた百頭の狼の群れに勝る。さらに、この群れを率いる狼は、無限に羊を補充することが出来る。

死者とは生者の次の段階でしかない。

家族や友人、仲間や恋人が生ける屍と化した時、あなたは剣を握ることが出来るだろうか？　あなたは戦わなくてはならない。命ある限りあがき続けることが生者の宿業だとすれば。

Village of the Dead

文　背戸　山葵
挿絵　ＵＮ＿ＤＯ

幻想世界魔物大全

登場人物紹介

ロバート・オルティス
パーティのリーダーであるヒューマン男性。
双剣を自在に操る腕前もさることながら頭の回転も速く、パーティの頭脳担当をも兼ねる、多芸多才な冒険者……のはずだが軽薄な見た目と態度が災いして、実力を過小評価されがち。

シャルロット（シャル）
エルフでありながら、恵まれた長身を生かし、三叉槍を手に豪快に敵を薙ぎ倒す、パーティの切込み隊長である女戦士。口も達者で交渉事もお手のものだが、主にその口はロバートに向けられる。ロバートを幼少の愛称のバブで呼ぶ。

アナスタシア（アーニャ）
ロバートの幼馴染であるノームの僧侶。普段は穏やかな物腰だが、肝っ玉が太く、怒らせると怖い。背が低く骨太であるノーム族なのを考慮にいれても肉付きがよく、ややぽっちゃり。

トップ
黒い髪と黒い眸をフードで隠した暗殺者。ヒューマン女性。
とある仕事ののち、ロバートとアルジとカクの間柄になり、ロバートに力を貸すことになった。実力は確かなのだが、東方の出のせいかずれたところがあるのが玉に瑕。

フェリーズ
ルクセン王城の使用人。フリルがあしらわれたエプロンスカートを見に着けた、人形のように可愛らしい少女。

Village of the Dead

―一―

エドガーが驢馬（ろば）と共に商いから帰ってくると、村は異様な静けさに包まれていた。夕刻、いつもならば子供らが跳ねまわり、一日の仕事を終えた大人らが停滞を誤魔化すジョークを交えて変わり映えのない四方山話（よもやまばなし）をしている頃なのに、誰の姿も見えなかった。

「おい、誰かいないのか」

呼びかけの声は虚しく木霊しながら寂寞のなかに溶けていく。

何かよくないことでも起こったのだろうか。青年の脳裏に不安がよぎる。

だが、どこにも争った形跡は見られなかった。危険な魔物はこの辺りには生息していないし、こんな死にゆく村を襲う盗賊なんていない。

村の連中総出で自分を出し抜こうとしているのだろうか。そうであって欲しいという考えから、彼はそれが妥当であると思った。くだらない脅かしを仕掛

けるくらいしか、この村に娯楽は無いのだ。
　エドガーは狩り立てられる小動物のように辺りを見回しながら、しかし、努めて落ち着いた足取りで酒場へと向かった。商いの帰りには一杯ひっかけていく習慣がそうさせた。酒場にはいつもとは違った、陰気な静けさが垂れこめていた。戸口に立って耳を澄ませると、微かに物音が聞こえた。
「誰かいるのか？」
　木戸に手をかけて中を覗くと、暗い店の奥に佇む男の影があった。
「なんだ、ダン。いるんなら返事くらいしたら――――」
　店に入ったエドガーは言葉を失った。カウンターの奥は確かに見知った店主のダンの姿があった。白髪交じりの髪を後ろで縛った、精悍なドワーフの中年だ。だが、その様子が異様だった。こちらを振り向いた彼には、およそ感情というものが無かった。目は虚ろで、健康的だった皮膚の色は不気味な青黒い色に変わっていた。光の加減などではなかった。
「うぐるあああぁぁぁ……」
　ダンはエドガーを見ると、不気味な唸り声をあげ、猿臂（えんぴ）を伸ばして襲い掛か

ってきた。掴んで来たその手は、死んだように冷たかった。
「おい、よせよ、離しやがれ！」
エドガーは咄嗟に手を振りほどき、力任せに横面を殴りつけた。だが、酒場の親父は少しよろめいただけで、文句も悲鳴もなく、再びエドガーに向かってくる。あっけにとられたエドガーの腕をごつごつとした手で把握し、あんぐりと口を開けた。
食い破られる皮膚と肉。溢れ出す赤い血。傷口。それらを順番に認識した後で、エドガーは噛みつかれたのだと理解した。続いて襲ってくる、焼けつくような痛み。
「何しやがるんだ！　この野郎！」
エドガーは逆上にまかせてダンを振りほどき、蹴り飛ばし、背後から椅子で何度も殴りつけた。木製の椅子は破壊され、店主は埃まみれの床の上に倒れたが、すぐに起き上がろうとしていた。
「く……なんなんだ、なんだってんだよ……」
恐ろしくなったエドガーは傷口を抑えて外に飛び出した。さっきまではいな

かったのに、通りや家屋のわきにちらほらと人影が見えた。よく見知った村の男たちだった。彼らもまたダンと同じように、血色と意思を失っていた。呻き声を上げながら、びっこのような足取りで近づいてくる。

恐怖と混乱の虜となったエドガーは、荷物と驢馬（ろば）を置いて駆け出していた。

ゾンビという動く死者の話を思い出した。確かにあの肌の冷たさも、色も、死人のそれとそっくりだった。なんでこんなことに――――わかるはずもなかった。

エドガーは半ば無意識に自宅へと帰っていた。このまま、村の外に逃れるべきだろうが、彼には妹がいる。安否を確かめずにはいられなかった。

家の中は静まり返っていた。荒らされた様子はないが、異様な気配が漂っている。商いの間、妹の世話を頼んでいるスティーブンもいない。

二階に上がり、妹の部屋へと向かった。日当たりのいい南向きの部屋だ。プレートにフランシーヌと掲げられた扉を開ける。恐る恐る室内を覗いた。窓際のベッドに妹の姿があった。上体を起こして、いつものように窓の外を見ていた。

「フラン……よかった、無事――――」
殴られたようなショックがエドガーを襲った。声に反応し振り向いた妹の顔は青白く、血管が浮いていた。瞳は輝きを失い、沼のようにどろりと濁っていた。
「ううあああぁ……」
地の底から響くような呻き声を発し、フランはベッドから落下した。痛みや衝撃をものともせず、肩まである亜麻色の髪を振り乱し、床を掻いて這い寄ってくる。その姿はどこか蜘蛛を思わせた。フランは足が悪かった。それにも関わらず、何か強烈な力がその肉体を操って、無理やり動かしているようだった。
「フラン……なんてこった……フランまで……」
エドガーは扉を勢いよく閉め、一階へと駆け下りた。あんな姿になったからって、妹を傷つけることはできない。それに、何か元に戻す方法があるかもしれない。とにかく、村を脱してこのことを誰かに伝えないと――――。
瞬間、階段の影から伸びてきた手に服を掴まれた。
「おおおおぉぉぉ……」

隣に住む、サラという少女――――いや〝サラだった〟ものだ。エドガーは驚きのあまり、身を翻してキッチンの方へ後ずさった。

ドン、と背中が誰かとぶつかる。サラの母親のバーバラだった。年増女のゾンビは、逃れようとするエドガーを抱きすくめ、押し倒そうとしてきた。娘もそれに加わり、一気に旗色は悪くなった。

「くそ……やめろ！　俺には、まだ……」

エドガーは我と我が目を疑った。

キッチンの奥や廊下の向こうから、顔見知った女のゾンビたちが、覚束ない足取りで歩み寄ってきていたのである。動転していたためか、いつもの習慣通りに、玄関の鍵を閉めずにいたのだった。己の間抜けさを呪ったがもう遅すぎた。

「あああぁ……」

「うううぅ……」

無数の死者の腕にとらわれ、埃塗れの床に押し倒されたエドガーは死を覚悟した。

この右手首と同じように、命を食われるのだ――――恐怖のあまり目をつぶった彼の首に、ぬるりとした感触が張った。
ゾンビの一人が首筋を舐めてきたのである。それだけではない。彼女らは倒れたエドガーの衣服を掴んで力任せに破り、露わになった肌をレロレロ……と舐め始めたのだった。さらに、下半身に取りついた誰かがズボンを脱がせてくる。
「おい、お前ら、何する――――んんんっ!?」
死者の血の気のない唇が押し当てられる。すぐに舌が入り込んでくる。冷たいぬめぬめとした粘膜が口内をねっとりと蹂躙する、そのおぞましくも妖しい快感は、こんな状況だというのにエドガーの男を反応させた。
充血した男の証を女ゾンビの一体が掴み、性器に導いた。一瞬で、ぬぷぬぷと根元まで飲み込まれる。内部は粘液で滑っていたが、死者の肉は冷え切っていた。女ゾンビは不気味な呻き発し狂ったように腰を振り乱す。粘液が結合部から溢れ、淫らな音が室内に響いた。
「んんっ……んんんっ……た、たまんねえ……ふうううぅ」

「あああぁ……うぅぅ……」
「あぁぁ……あむっ……れろれろ……」
ゾンビと交わる忌避感や恐怖はなんの歯止めにもならなかった。全身にリップを落とされ、舐めまわされる快感と蜜濡れた膣肉で肉棒を扱かれる快感は、抵抗の意志を甘美に篭絡し、理性を蕩かした。女ゾンビの群れに纏わりつかれ、全身を嫐られながら、エドガーは射精していた。
ことが終わると別なゾンビが入れ替わった。萎える間もなく男の弱点を膣肉でシェイクされる。絶え間ない快感が駆け巡る。青年は身動きが取れないままビクビクと震え続ける。歓喜の喘ぎと死者の呻きが混ざり合う。
「あぁぁ……ふぅぅ……こ、こんなのたまんねえ……また、漏れる……」
死肉が絡み合い、犇めき合い、誰に何をされているのか、もうわからなくなっていた。
いつの間にか、妹のフランシーヌがゾンビに混じって自分を犯していることも。
どうして突然村がゾンビだらけになってしまったのかということや、どうし

て女のゾンビに犯されているのかも、何もかも分からない。わかりようがない。
やがてエドガーは考えることを諦めた。与えられる肉の悦びだけに集中し、女ゾンビに全身を嫐られる快感に浸りきり、ただ惨めに精を漏らした。何度も、何度も、何度も……。

死者と生者のおぞましい交わりを、見る者があった。黒いローブに身を包んだ、小柄な誰かが廊下に立って覗いているのである。何かをぶつぶつと呟きながら、手帳にペンを走らせる様子は、ただ見ているのではなく観察しているという方が正しそうだ。しばらくすると、女はその場を立ち去った。
やがてゾンビの群れの中から男の断末魔が響いた。そして、永遠にも似た静寂が再び村を包み込んだ。

―二―

「止せよ。嫌がってるだろ」

自分の口から出た、ありきたりな文句に辟易とした。それをさせた原因である、ありきたりな酔っぱらいは、酒気で濁った一瞥を僕にくれると、

「なんだてめえ？　俺に文句があるってか？」

これまたありきたりな口上を述べ、腰を上げた。僕より頭一つ大きいトゥラン人だ。いかにも荒事に慣れていますと言わんばかりの体躯とむさくるしい髭面、まこと冒険者らしい冒険者だ。

粉をかけられていた酒場の女給は諍いの隙に店の奥へと逃げようとしたが、男に腕を掴まれてしまった。彼女は短い悲鳴を上げたが、僕と男を見比べ観念したみたいに首を垂れた。

「見ろ。キャシーは嫌がってねえじゃねえか。ええ？　それとも、てめえの連れでも紹介してくれるってのか」

酔漢は僕の背後のテーブルに着く三人の仲間を見やった。

「ガキのくせに、女三人も侍らせやがって。気に食わねえな」
羨ましいなら代わってやりたいよ、という背後の三人への当てつけは、胸に秘めておくことができた。
「なあ、あんた。いくら女が欲しいからって無理矢理は止そうや、ここは――」
ここは猿の国ではないと言いかけて口を噤む。すぐに余計な一言を発するのは僕の悪い癖だ。
「ここはルクセンの王都だ。厄介事を起こして巡邏兵の世話になるのはごめんだろう？」
「ケッ、てめえらの領地さえ守れないルクセンの兵士に、なんでこの俺が世話になる。恩知らずってもんだぜそりゃあ。やつらの代わりに魔物を退治してやってんなぁ誰だ？　ここらの人間に食い物を運んでこれるなぁ誰が商人を守ってやってるからだ？　俺たち冒険者だろうが！」
男は酒場中に響く大きな声でがなった。周囲の冒険者は珍しい酒の肴だとばかりに、賛同の声を送ったりはやし立てたりしていた。
ルクセンはあの忌まわしいルクセン事変最大の加害国であり被害国だ。ザモ

ラとトゥランとの間で結ばれた講和条約で領土の多くを失い、かつて大陸最強と謳われた騎兵隊は縮小させられ、ルクセンは今では王都や都市部の防衛にさえ事欠いていた。そのため、この国では不足する治安維持能力を冒険者や傭兵によって補っている。そんな中には、タチが悪い連中がいる――――というよりも、冒険者が生き抜くためには、お行儀のよさよりもある種のタフさが必要だ。僕だって餌場に群がるハエの一匹なのだから、こいつの言い分はともかく情緒は理解する。だからって、狼藉を見過ごせない。この国は僕にとって単なる儲け口ではなく、生まれ故郷でもあるからだ。

「こっちは命張ってんだ。おめえだってそうだろ？　危険を引き受けてやってるその礼に、この国の女は自分から股を開くのが筋ってもんだぜ。なあ？」

酒乱の戯言だ。しかし、野郎連中からは下品な賛同と笑いが沸き起こり、キャシーは俯けた顔を真っ赤にした。

「よお、まあ、落ち着けって同胞（クラブック）。プロバに誓って、いくらなんでも、そういう冗談はよくねえぜ？　ただの下種じゃねえか……おっと」

ピキ、と血管が切れるような音が聞こえた気がした。まずったか、と思った

時には、男の顔にはぶちのめしてやる、と書いてあった。
「若造が舐めくさりやがって。文句があるなら、冒険者らしく、いこうじゃねえか。プロバに誓ってな」
売り言葉に買い言葉。あとは、冒険者の守り神プロバのお気に召すまま。だが、勿怪の幸い、僕への怒りが下品な根性に勝ったのか、男は娘を解放していた。
「あー……仕方ねえな」
威嚇的に手の関節を鳴らす男と対峙し、僕は頭を掻いた。かなりの量の酒が入っているのか、相手の足元は自信に比べて覚束ない。頑丈そうだし、多少痛い目を見てもらえばいいだろう。
僕は〝彼女〟に向かって言った。
「おい。手を出すなよ」
「は。今更怖気づいたって――――」
酔いどれは言いざま拳を振りかぶった。
「お前じゃない」

僕は精彩を欠いた拳を避け、腕を取って脚を跳ね上げた。
勢いづいて前のめりになった巨体が宙を舞う。地鳴りみたいな音を響かせて木製の丸テーブルに叩きつけられた男は、そのままテーブルを巻き込んで壁に激突し、動かなくなった。頭を打って気死したのだろう。
野次馬連は茫然とした、あるいは拍子抜けした様子だった。彼らは僕がぶちのめされるのを期待していたらしい。ザマーミロだ。
「バブ。てめー、わざとだろ。せっかく気持ちよく飲んでたのに」
と、エールのジョッキを片手にシャルロッテが絡んでくる。美しい金色の髪を腰まで伸ばした長身のエルフの戦士で、我が部隊の切り込み隊長だ。あけすけな性質で、こんなむさくるしい酒場でも上半身には胸元を隠す布切れ一枚しか着けていない。
「しょうがないだろシャル。他の卓に突っ込ませるわけにはいかない」
「けがはない？　ごめんね、シャルが止めるなっていうから……」
申し訳なさそうに謝るのはアナスタシアだ。ノーム族の僧侶で僕の幼馴染。変に生真面目な彼女は、仕事を終えた後でも法衣のままだ。ゆったりした服の

上からでもわかる、肉感的な体つきに周囲の数人が淫らな眼差しを向けている。
僕はさりげなく体を盾に視線を遮った。
「平気だよアーニャ。それより――――」
僕は天井を見上げた。というよりも、梁に腰かけてこちらを見下ろす、フード付きのマントを目深に被った怪人をだ。
「トップ、降りてこい」
トップは登った時と同じように音もなく目の前に降り、フードを脱いだ。
少年のようにも見える中性的な顔立ちのヒューマンの少女だ。闇に溶け込むような黒い髪と黒い眸はどちらもこの辺りでは見られないものだ。
「ロバート殿。なんで止めたか？　ああいうやつ。黙らすにはコレ。一番」
袖口に隠したナイフを見せながら、剣呑な目つきで僕を睨む。
彼女は……暗殺者だ（マジかよって僕だって思うさ）。今もそのウデマエのほどを見せようとしてくれていたのだが、僕が止めたので不満らしい。
「あのな。ここは酒場、愉しくお酒を飲むところなんだよ」
「仕掛けたのヤツ。アルジ守る。それが役目」

「いや、あれは単なる……そう、ああいうのは、冒険者同士の交流というやつだ。殺すのは……ええと、しきたりに反する」
「そうか。冒険者のしきたりは変わっている。でも、諒解だ」
トップは得心して頷くと手品みたいにナイフを消してしまった。
変わってるのはお前だと言うだけ無駄だ。出身の違いか、育ってきた環境の違いか、彼女はこういった危険な勘違いをしばしば披露する。
トップとは半年ほど前、悪徳の国ザモラでの仕事の際、行きがかり上、仲間――と言っていいのかはわからないがクランに居つくようになった。というのも、トップの言い分によれば、僕と彼女はアルジとカクという間柄になったらしい。王族と騎士よろしく主従で結ばれた関係ではなく、僕が生活の面倒を見る代わりに、腕を貸すのだという。遥か東方、ズィトーの文化は不可思議だ。それ故に、神秘的ではあるのだが――と、閑話休題。
酔っぱらいが意識を取り戻して起き上がってきた。頭に割れた木片が刺さって、そこから血を垂らしている。
「よくもやりやがったなこのチビ！」

痛い目を見たのに、まだ気力は萎えないようだ。
やつの仲間らしき男がもう止せ、と抑えているが、どうしたものか。
「バブ。やっこさん、まだやる気みたいだぜ？　おもしれえから、付き合ってやれよ」
「け、喧嘩はよくないよ……お店にも迷惑だし……謝って仲直りしなきゃ」
シャルとアーニャが口々に言う。まるで天使と悪魔だ。これだったら、トップを止めなければよかったか。周囲の客も半ばしらけ気味だ。女給も無事だし、尻に帆をかけるか。
そう考えた矢先、酒場の扉が勢いよく開かれ、巡邏兵が5人なだれ込んできた。その場にいた全員が固唾をのんで思わぬ乱入者を注視した。
「残念だが同胞（クラック）、お迎えが来たみたいだぜ。少し絞られてくるんだな」
僕がこれ幸いと勝利宣言をすると、男はトゥラン語で訳しただけで品が堕ちそうな罵りの言葉を口にした。だが、隊長と思しき帯剣した兵士は、思ってもみなかったことを口にした。
「ここに、ロバート・オルティスはいるか？」

「へ？　おいおい待てよ兵隊さん。僕は喧嘩を売られただけ。スケベ野郎はそこの……」

僕は訂正しようと兵士に詰め寄った。だが、返ってきたのは冷たい一瞥と理解しがたい宣告だった。

「貴様がそうか。今晩のことは知らんが、貴様とクランに逮捕命令が出ている」

大人しくお縄につくしかなかった。外へ出るには五人を相手にしなければならない上に、酒場の外にはさらに数名の兵士が待機していた。その数の武装した兵士相手では、厳しい戦いを強いられそうだったし、逃亡に成功したとしても二度とルクセンの国境をまたげなくなりたくはなかった。

「よお、バブちゃん。あたしらに隠れてなにやらかしたんだ？　お姉さんに言ってみ？」

シャルは苦し紛れにからかってきたが、僕にも心当たりはまるでなかった。隊長に訊ねても機密事項の一点張りで埒が明かない。

僕らは後ろ手に縛られ、大通りを抜け城へと連行された。

吸血鬼

吸血鬼

危険度：A　出現場所：人里離れた古城、古屋敷等
知　能：高い　特殊能力：吸血・魔眼・眷属化

身体を流れる血潮は熱く、赤々と漲（みなぎ）り、古来より生物の命の根源、乃至は生命力そのものであると考えられてきた。吸血鬼（ヴァンパイア）はその命の水を吸い、自らの糧とすることで不老不死を保つ夜の一族である。

絶世の美女、あるいは絶世の美男子として不朽の美を恣にする不死者だが、高位の魔族と見る向きもある。自らを夜の王と任じ、挙措は優雅で洗練され貴族的であるが、あらゆる人間を自らを満足させるための餌や道具としか考えていないその本質は暴君的である。

強靭な肉体や強大な魔力を有しており、特にその魔眼は危険で、瞳を覗き込んだ者はたちまち吸血鬼に魅せられ意のままに操られる人形と化してしまうだろう。

吸血鬼の行う吸血には、生命力を奪うだけでなく、ある種の儀式的な意味合いを有している場合が存在する。この血の契りを果たした人間を眷属に変えてしまうための儀式である。快楽を分かち合う同胞として、あるいは永遠に奉仕させるための憐れな奴隷として。

吸血鬼は他にも、オオカミやコウモリに変身する、霧のように実体をかき消すことができる、衣服やマントを操作する等、様々な能力を有している。その反面、弱点と呼べるようなものも数多く言い伝えられている。例えばそれは、鏡に映らないであったり、にんにくを嫌うであったり、日光に焼かれてしまうであったり、心臓に杭を打たれると死ぬであったり、ばらまかれたものを拾わずにいられない、というような滑稽味のあるものまで存在する。

しかし、こういった弱点のうちほとんどが物語の上で恐ろしい存在を打ち負かすためのエッセンスに他ならない。恐ろしい存在ではあるが、対抗する手段はあるのだと説くことで、現実の破壊者たる怪物がもたらす精神的衝撃を和らげるのである。

前述したように、吸血鬼は元を辿ればかつて吸血鬼の牙にかかった人間である。だからと言って油断してはならない。その美しい姿に、柔らかな言動に惑わされてはいけない。彼らは全ての人類の天敵である。人間の姿をしているからといって、躊躇ってはならない。吸血鬼の眼には自分と似た姿をしたあなたは、食べごろの家畜にしか映っていないのだから。

吸血鬼

Village of the Dead

文　背戸　山葵
挿絵　な　　ぐ

幻想世界魔物大全

登場人物紹介

ルイ
村一番の名家であるブラン家の少年。同年代の少年達と遊ぶよりも読書を好む、物静かで内向的な性格。

シャルディアナ・シエラ・ブルームズベリー
永遠に陽の昇ることない、常夜城ブルームズベリーの主。ブルームズベリーの悪魔とも。その言動は人間に計れるものではない。

老ジャニス
白髭をたくわえた村一番の古老。かつてブルームズベリーの悪魔と出会ったことがある。

アンドレイ
ルイの１つ年上の友人。
ルイとは対照的で、快活で怖いものしらず。

スケルトン

スケルトン

危険度：C　　出現場所：墓場、廃墟、迷宮等
知　能：なし～低い　　特殊能力：刺突・斬撃攻撃軽減

動く白骨。
その由来には様々なものがある。屍が瘴気でリビングデッドとして動き出し、やがて肉が朽ちて骨だけになったもの。すでに骨となっていたものを、死霊術で動かすもの。あるいはゴーレムと同様の魔術で製造され、土やレンガの代わりに骨を素材としたもの。死者の霊が骨を依代として憑依したものや、他にも多様なバリエーションが考えられる。
いずれにせよその特性としては、通常の生物とは生死の概念が異なることが挙げられよう。呼吸しないので窒息はありえず、血が流れないので失血死もしないし、脳や臓器の損傷も恐れる必要はなく、病気や加齢による死亡とも無縁である。

肉体を持つ相手を想定している、斬る突くを軸とした剣法は大いに苦戦を強いられるだろう。

しかし所詮はただの骨である。骨自体を折られ砕かれれば、活動停止に至ることは珍しくないし、聖なる祈りにより浄化したり、術式そのものを解いたりすれば、元の骨に戻る。

知性はおおむね低い。これは、そもそも生前の魂などが骨を動かしているわけではなく術師の簡素な命令だけが機能しているから、脳などの欠落によって単純な行動しかできないから、などの場合が多いためである。つまり多くのスケルトンは、術師に操られるやや出来の良い人形か自然発生的な存在に過ぎず、それゆえに出没するのは術師の支配する領域か元となる死体が供給される墓場となりがちである。

以上、諸々の要素を勘案してみるに、スケルトンというモンスターは総じて危険度の低いものだとは言えそうだ。しかしながら、同じ髑髏の姿を取るモンスターは、悪魔や死霊や死神など何種類と存在するわけで、油断は禁物である。

そして危険度とは別に、哀れを催すモンスターでもある。迷宮探索の途上で

倒れた冒険者が、生前の身のこなしも知性も失って木偶の坊のごとき敵対行動しか取れない姿は実に悲惨だ。その骨の身に女性用の法衣（ローブ）や、スカートの切れ端がまつわりついていた場合には、なおのこと。

ただし、何事にも例外はある。

人であった時の魂をそのまま宿し、理性も知性も失わず、誰に操られるわけでもなく、人間に敵対するわけでもない。そんなスケルトンもいるかもしれない。

もし遭遇した際には、不幸な事態を避け、彼（彼女）の話を聞いてみるのもいいだろう。

死なぬ少女の朽ちた果て

文　　茶
挿絵　笹谷四季

幻想世界魔物大全

登場人物紹介

ベアトリーチェ・シルヴェストリ
とある国の領主の娘。家督を継ぐ権利のない女子は政略結婚の道具とされる時代であり、物心ついてからは悪い虫のつかぬよう、ほとんど屋敷から出ずに育てられたため、かなりの世間知らず。
骰子(さい)の死神に不滅の魂を与えられるが……

マルティーノ
シルヴェストリ家の従僕。幼い頃は家柄を気にせずベアトリーチェと遊ぶ仲だった。今もベアトリーチェに、ほのかな恋慕の情を抱いている。

骰子(さい)の死神
死霊術師。骰子の出目に従い各地に災厄をもたらす。ベアトリーチェの前に現れ、死を告げる。

ナルディエーロ
小説家志望の貴族の娘。好奇心を満たす為なら何ものも恐れない気質の持ち主で、夜な夜な歩き回る骸骨の噂を聞きつけ、喜々として真夜の墓地に向かい、ベアトリーチェと出会う。

キョンシー

キョンシー

危険度：C　出現場所：墓地、洞窟、戦場跡等
知　能：なし～低い　特殊能力：麻痺
※意志のあるキョンシーの場合、危険度、知能は個体差による

かつて東の大陸を支配していた大国において、皇帝に仕える道士たちはその術で死体を操り、使役していたとの記録が残っている。使役されていた死体は、キョンシーと呼ばれていた。元々は戦場で死んだ死者たちを、自ら墓地へと歩かせるために用いられていた術だったが、やがて物資の運搬や農作業、そして戦闘そのものへも使用されるようになっていったという。キョンシーには意識もなければ感情もなく、五感もないため疲れることのない労働力、軍事力として重宝されていた。

しかし、そもそもが死体であるがために、ほとんどの関節が曲がらず、動きが制限される上、時を経るにつれて腐敗していくという欠点もあった。そのた

めいつしか、皇帝をはじめ、宮廷の貴族たちから疎まれ、省みられることもなく、キョンシーも道士も歴史の中へと埋もれていく事となった。

皇帝に仕える道を失った道士たちは、大陸中に散らばり、運搬や農作業などを請け負うなどして細々とその技術を伝承していったという。

長い年月の中で、一部の道士たちはその技を高め、意志を持ち、より滑らかに動くことのできるキョンシーを生み出したとも言われる。その秘儀は父から子、子から孫へと代々受け継がれたとされるが、今なお受け継がれているかは不明である。

前述の通り、通常のキョンシー個々の能力は低く、よほどの集団を相手にしない限り、冒険者が後れを取ることはない。しかしながら、意志あるキョンシーによっては武芸者並の身体能力を持つ個体もいたとされ、その危険度は並のキョンシーの比ではない。

残されている遭遇談は少ないものの、キョンシーの爪は長く伸びており、麻痺毒がある他、その毒を用いて麻痺させた人間の体液を啜るという話も伝わっている。

摘まれし花の如く

文　ｍａｊｉｋｏ
挿絵　シグにゃむ

幻想世界魔物大全

登場人物紹介

レン
道士の少年。元々は冒険者という名の風来坊であったが、故郷をキョンシーによって滅ぼされ、キョンシーを操る道士に復讐するため、自らも道士を目指す。復讐を果たすならどんな対価をも惜しまない。

リズ
レンの恋人。キョンシーによって村が襲撃された際、他の年頃の娘たちと共に行方不明となる。

村を襲撃した道士
多数のキョンシーを操り、一夜のうちにレンの村を滅ぼした道士。村を襲った理由や、一人残らず村の住人を皆殺しにした理由は一切不明。

フェイ
異国の女道士。レンの必死の嘆願に折れ、彼を弟子とする。あらゆる道術に精通しており、途方もない年月を修行に費やしたと伺わせるが、外見は若々しく、妖艶な雰囲気を漂わせる。

摘まれし花の如く

―一―

いつもいつも、見る夢は決まって同じだ。
眠る度に、あの日の絶望を、怒りを、何度も何度も、体験する。

村を出て、冒険者になってから約二年。
新米というほど浅はかでもなく、熟練と言えるほど老練でもない。
まさに、ギルドにおいては中堅という扱いだった。
この日も、簡単な依頼をこなした帰りだった。
通い慣れた冒険者ギルドの扉を開ける。
そこで、違和感を感じたことをはっきりと覚えている。
いつもよりも、自分に集中する視線が多いという事に。
だが、どいつもこいつも、目を合わせると気まずそうに眼をそらす。
若干気分を害しながら、カウンターへと進み、窓口の女性に依頼事項の達成

を報告する。
「確かに、依頼の完了を確認しました。報酬を用意しますので少しお待ちください」
淡々と必要事項を確認し、報酬金を用意する女性職員。
その間にも、背中にいくつもの視線を感じる。
イライラしながら待っているうちに、女性がカルトンにお金を載せて差し出してくる。
「ありがとう」
それを受け取り――踵を返そうとしたところで。
「レン」
顔馴染みの一人が、意を決したように声をかけてきた。
「なんだ？　酒なら奢らないぞ」
不機嫌を隠そうともせずに、ぶっきらぼうに言葉を返す。
相手は一瞬怯んだ様に目を瞬いた後、決まり悪げに言葉を続ける。
「いや……知らないのか？お前の故郷の事」

「は？　なんだってんだ？」
聞き返しながら、胸騒ぎを覚えていた。
相手は、しまったという顔をしつつ、
「いや、俺もさっき聞いたばかりなんだが」
「もったいぶらずに言えよ。何だってんだ？」
「いいか。落ち着いて聞けよ……。その、魔物に襲われたんだ。おまえの村――」
話を最後まで聞くことはできなかった。
その時には俺は、ギルドを飛び出していたから。
おいっ、とかなんとか呼び止める声には振り返ることもなく、ギルドの外に繋いでいた馬に飛び乗り、思い切り腹を蹴り上げる。
自分の馬じゃない。誰の馬なのかも知らない。
だが、そんなことはどうでもよかった。
疾走する馬上で揺られながら、俺はどんどん膨らんでいく嫌な予感に唇を噛み締めていた。

活動拠点にしていた町から、故郷までは馬を走らせれば三時間ほどで着く。
そこで俺が目にしたものは。

絶望だった。

村のありとあらゆるものが破壊されていた。
踏み荒らされた畑。
突き倒された柵。
崩れ落ちた家屋や作業小屋。
無残に殺された家畜たち。
そして漂う、吐き気を催しそうなほどに濃い血の匂い。
それらの風景を、唇を噛み締めながら通過し、いつも子供たちが走り回り、賑やかだった村の中央広場にたどり着く。そこには筵(むしろ)がかけられた何十もの遺体。
忙しそうに走り回っているのは町の騎士団の連中だった。

担架に乗せて、いくつもの死体が、次々に広場に運び込まれては並べられていく。
「――レン！」
騎士団の知り合いが、俺を見つけて駆け寄ってくる。
俺はきっと、相当ひどい顔をしていたことだろう。
男は気の毒そうな表情を浮かべて、俺の肩に手を置く。
「なんと言っていいかわからんが……すまん。知らせを聞いて俺たちが駆け付けた時にはもう……」
「魔物に襲われたと聞いた」
「キョンシーだ。アンデット系の魔物だ。何体かは倒したんだが、ほとんどの奴には逃げられた。元々、本隊は撤収した後のようだった」
「キョンシー……」
「ここだけの話だが」
男が身を寄せ、耳元で囁く。
それを聞いて、俺は全身の血が沸騰するのではないかと思うほどの怒りを感

じた。
　男はこう囁いたのだ。
「キョンシーには意志がない。だからこれは、人為的な襲撃だ」
「っ……誰が」
「わからん。周辺も探らせているが」
「……。生き残りは？」
「残念ながら……お前の家族も。だが、奇妙なことだが、若い女たちの死体がない」
「リズ……」
「リズ、おまえの恋人だったな。死体がないということは、若い女たちだけ逃げたのかもしれん。或いは犯人が連れ去ったか。いずれにせよ、まだ希望はある。だから――無茶はするなよ、レン」
　騎士団の男はそう言いおいて、仕事に戻っていった。
　俺は、自分の実家に行ってみた。
　筵をかけられた、両親の遺体を確認した。

まるで、長い爪か何かで引き裂かれたような、無残な死体だった。
恐怖と絶望に見開かれた目を、そっと閉じてやる。
村の顔役を務めていた父だ。
父も、そして母も。傷は体の前面にあった。
逃げなかったのだ。
勇敢にも、二人はキョンシーに立ち向かったのだろう。
リズの家にも行ってみた。
同じように、リズの両親の遺体があった。
だが、リズの遺体はなかった。
小さな村だ。
村人の顔も名前も、好きな食べ物も嫌いな虫も、よく知っている。
それらすべてを、一瞬にして奪われた。
膝から頽(くずお)れた俺は、天を睨みつけながら、慟哭した。
涙が溢れてくる。
止めようとも思わなかった。

ただ――決めた。
誰が、何のためにこんなことをしたのかわからないが、必ず報いを受けさせてやる、と。

―二―

夢から覚めて。
「――――」
無言で、天井を睨みつける。
毎日毎日、飽きることなく、あの日の夢を見る。
あの日、故郷の村は襲われ、皆殺しにされた。
襲われた理由もわからなかった。
若い女の遺体がなかったこと、周辺に逃れた形跡もなかったことから、騎士

団は誘拐目的だったと考え、周辺の奴隷市場などを調査したが、手掛かりすら掴むことができなかった。
あれ以来、他の村などがキョンシーに襲われたというような事件も発生していない。
不思議な事件は迷宮入りし、やがて伝説やおとぎ話の様に歴史の狭間に埋もれていってしまうのかもしれない。
だが、俺は諦めなかった。
騎士団が捜査を打ち切った後も、俺は一人で復讐の方法を探し続けた。
犯人については、皆目見当がつかなかったが、キョンシーについてはある程度調べることができた。
道士という人々によって操られている死者だということ。
かつて、東の大国では労働力や軍事力として使役されていたということ。
その爪には強力な麻痺の毒があること。
人間の体液を啜ること。それまで深く考えていなかったが、確かに村の遺体はどれも深々と切り裂かれ、村中に濃い血の匂いが漂っていた割には現場に残

されていた血痕は少なかった。
あれはおそらく、キョンシーに血を啜られたからなのだろう。
そして、通常の物理攻撃では倒すことができないこと。
たとえ、剣で斬ったとしても、痛覚もないキョンシーの動きを止めることはできないのだそうだ。
キョンシーを倒すためには、これを操る道士と同じく、道術を身に着ける必要があること。
そこから方々を探し回り、一人の道士を見つけた俺は弟子入りを志願した。
最初はけんもほろろに断られた。地に頭を擦り付け、必死に願ったが、弟子など取るつもりはないと一蹴された。
しかし、故郷の村がキョンシーによって皆殺しにされたことを話したら、どういう訳かすんなりと弟子入りを認めてくれた。
後に弟子入りを認めてくれたのはなぜかと訊いたこともあったが、何も答えてはくれなかった。単なる同情だったのかもしれない。だが、同情でも憐みでも何でもよかった。

力を得られるなら。復讐するための力を手に入れられるなら。
厳しい修行にひたすら耐え、力を磨き続けてきた。
そして――あの日から二年、俺は道士として一人前になるための最終試練を受ける日を迎えることになった。

＊＊＊

道場に入ると、師が待っていた。
と、言っても見た目は二十代半ばの妙齢の女性だ。
赤い髪をした白皙（はくせき）の美貌。
朱色の、異国の服に身を包んでいる。
動きやすくするためにスリットが入っており、そこから覗く白い太ももが目に眩しい。
常人であれば、一瞬にして心奪われてしまうであろう、妖しい美しさを持つ女だった。

とはいえ、道術を極めたその年齢が、見た目通りとは限らない。
それに、あの日、リズを失ってから、俺は一度も女性に対して心動かされるということがなかった。
「準備はよいか、レン」
師――二年共にいるが、名すら知らない――が、静かに問う。
「はい」
師のものとは少しデザインが異なるが、俺も黒の道服に身を包んでいた。
「為す事はわかっているな。そもそも、宇宙のあまねく森羅万象はみな、陰と陽の結びつきによって成り立っている。陰陽が平衡を欠けば消長盛衰し、調和すれば秩序が保たれる。天地万物の一つである人間もまた同じ陰陽の原理に従っている。一己の人間もその中に陰陽があり、陰陽の調和があればこそ秩序ある生活を営むことができる。即ち、平衡を欠けば病となる。男女においては男を陽に、女を陰とする。天地万物の陰陽が調和して初めて、人は死を乗り越え、死者をも使役することを可能とする」
「はい」

「気を練れ」
「はい」
両手を複雑に組み合わせて、印を組む。
呼気を整え、気を練り上げていく。
「試練を与える」
師が、印を組む。
その身から、練り上げられた膨大なまでの気が放たれるのを感じる。
懐から二枚の反魂の札を取り出し、空へと放り投げる。
反魂の札が空中にとどまり、光り輝く。
徐々に輝きを増していき、頂点に達したところから徐々に弱まっていく。
するとそこに、二体のキョンシーが出現していた。
一体は橙色の道服に身を包んだ長髪の女。
もう一体は青色の道服に身を包んだ短髪の女。
二体ともが、出るところは出た素晴らしいプロポーションをした美女だったが、死者であるがゆえに、その肌はくすんだ灰色だった。

これまで、何度も修行の相手をしてきた。
生前はどんな女性だったのだろうか、と考えたこともあったが、いつしか、そんな感慨も覚えなくなった。
額に貼られた反魂の札を通じ、師の道力によって操られている、この世の理に反し、蘇った存在。
この世にあるべからざる存在。
もはや、人間ではないのだ。
「――さあ、可愛がっておやり」
師の言葉を受けて、二体のキョンシーは両腕を前に伸ばし、ぴょんぴょんと飛び跳ねながら近づいてくる。
その度に、豊かな双乳が揺れる。が、こちらもやはりどことなく硬く、重そうだ。
「さあ、レン。精を漏らすことなく、耐えて見せよ」
かつて――東の大国でも道士の修行に用いられていたとされる、房中術だ。
簡単に言えば、精を放出しないようにしながら、女性を絶頂させること。

そうすることで、女性の中に流れる陰の気を取り込むことができる。
逆に、絶頂してしまえば、精とともに陽の気が女性に流れ込んでしまう。
俺は全身の気を練りながら、近づいてくる二体を待ち受ける。
先に俺の元にたどり着いたのは、長髪のキョンシーの方だった。
両腕を伸ばしたまま、体当たりするようにぶつかってくる。
俺の胸元で、豊かな胸がぐにゃりと歪む。
反魂の札越しに、感情のない眼差しが俺を捉え、冷え、固まった唇を、俺のそれにぶつけるように当ててくる。
俺は当然のごとく、それを受け止める。
逆に、腰と後頭部に首を回し、冷たい体を抱きしめながら、より深く唇を重ね合わせ、舌で押し開く。
舌を伸ばし、キョンシーの舌と絡ませながら、唾液を流し込み、あるいはキョンシーの冷えた唾液を啜る。
死人であるにもかかわらず、どことなく甘い花のような味と香りがする唾液を飲み込み、お返しに俺の唾液を飲ませていく。

何度も繰り返していくうちに、徐々にキョンシーの体温があがっていき、硬かった体が解れていく。
俺の舌に応えるキョンシーの舌も柔らかく、滑らかに動いていく。
房中術において、キスは基本とされている。
相手の心を解すことが肝要なのだ。
無理やりに犯したところで、気の交わりは生まれない。
もっとも、心を持たないキョンシーに対し、どこまで効果があるのかは疑問だったが。
だから、関節が硬くなっているキョンシーに対しては、その身を揉み解すことが重要だと俺は認識していた。
片手でキョンシーの大きな胸を解すように揉んでいく。
そうしながら、横目でもう一人の短髪キョンシーの位置を探る。
ぴょんぴょんと跳ねながら、俺の背後に回った短髪キョンシーが抱き着いてくる。
抱き着くというよりは、体当たりに近いが。

毎回、遠慮のない衝撃によろめきそうになるが、ぐっと足に力を込めて耐える。
冷たい唇が、俺の耳朶を咥える。
冷たい唾液と舌が耳穴に侵入してきて、ぞくり、と身体が震える。
キスをしながら胸を揉み解され、徐々に体温が上がってきた長髪キョンシーが、俺の股間に掌を這わせてくる。
ズボンの中に侵入してきた長髪キョンシーの冷たい手に掴まれ、外に引っ張り出された俺の陽根は、練り上げた気が巡り、硬く隆起している。
最初の動きからは想像もつかない滑らかな動きで、長髪キョンシーがしゃがみ込み、何の躊躇いもなく陽根を口に頬張る。
たっぷりと唾液を絡めた舌が、陽根の先端を舐めしゃぶる。
裏筋、カリ首、亀頭と敏感な場所を的確に責められ、快楽に声を出してしまいそうになるが、ぐっと堪える。
俺は、長髪キョンシーには己の好きなようにさせつつ、背後にいた短髪キョンシーの手を掴んで、前に移動させると、先ほど長髪キョンシーにそうしたよ

うに唇を重ね、舌を絡め、唾液を交換していく。
徐々に、短髪キョンシーの体温も上がり、動きが滑らかになっていく。
短髪キョンシーは、俺の道服の上着を脱がせると、乳首を弄り始めた。
冷たい指先で転がされる度、ぴくり、と身体が震えてしまう。
二体のキョンシーは頬を上気させ、瞳を潤ませながら、情熱的に俺に奉仕をする。
だが、それはあくまでも生理的な反応に過ぎず、彼女たちに、俺への好意はおろか、一片の感情すらもない。
俺もまた、快感を感じてはいたが、流されているわけではなかった。
気が乱れないように細心の注意を払いながら、二体のキョンシーの胸を揉みしだいていく。
十分にキョンシーたちの体が解れたところで、俺は長髪キョンシーの口から陽根を抜き出し、仰向けに横にさせる。
足を開き、股間に顔を埋める。
陰唇にゆっくりと舌を這わせ、花弁が綻んできたところで、その奥へと侵入

していく。
短髪キョンシーが、股間の方に移動し、陽根を口に含んだ。
唇をすぼめるようにして、吸い上げてくる。
さらに、伸びた手が、乳首をくすぐってくる。
俺はその刺激に、気を乱さないようにしながら、長髪キョンシーの陰唇に愛撫を続けていく。
やがて、そこからはとろとろと愛液が溢れ出してきた。
わざと淫らな音を立てながら啜ってやると、キョンシーの体もわずかにぴくぴくと震え、溢れ出してくる蜜の量も増してきた。
舌を抜き、指を差し込んで解れ具合を確かめる。
指の数を二本、三本と増やし、十分に襞が解れるまで中をかき回した後、引き抜く。
指と陰唇の間に、白くねっとりとした愛液の糸が引いた。
短髪キョンシーの口中から陽根を引き抜き、長髪キョンシーの陰唇にゆっくりと挿入していく。

幾重にも重なり、愛液で十分に潤った陰唇が、絡みつき、陽根を扱き上げる。
十分に解れ、柔らかくなったキョンシーの淫肉は、生者とは比べるべくもない快楽を齎す。
いつの間にか、俺の顔にはびっしりと汗が浮かんでいた。
ともすれば、理性を押し流されそうなほどの快楽。
それに耐えながら、気を練り上げ、ゆっくりと腰を動かす。
短髪キョンシーが、背後から抱き着き、乳首を弄りながら、耳たぶをしゃぶってくる。
背中で、大きくひしゃげる乳房の感覚も、今の俺にとっては悩ましい。
空気を取り込む度、キョンシーたちの肌から匂い立つ香りに、くらくらとしてくる。
いつの間にか、彼女たちの灰色だった肌までもが、薄桃色に染まっている。
腰を動かすたび、ぐちゅっぐちゅっと卑猥な音が響き、脳天を貫くような快感に、身を任せたくなる。
睾丸の中で、精が放出を求めて煮え滾っているのがわかる。

長髪キョンシーの媚肉もまた、熱い迸りを求めて、陽根を絞り上げ、子宮口が吸いつき、吸い上げてくる。
徐々に腰の動きを速めていく。
ぱちゅんっ、ぱちゅんっと肉と肉がぶつかる音が、道場に響き渡る。
傍目には、まさに淫らな饗宴と映る事だろう。
言葉を交わすこともなく、互いに喘ぎ声を漏らすこともない。
ただただ、肉を打ち合う音、そして湿った水音だけが周囲に響く。
静かでありつつも、激烈な戦いである。
それは、俺の頬を流れる汗でも知れる。
師は、腕組みをしたまま、微動だにせず、じっと見つめている。
突き上げる度、長髪キョンシーの胸が激しく踊る。
俺は堪らず、腕をつかんで、その身を引き起こし、座位の形にして、桃色に色づいた乳首に吸い付いた。
長髪キョンシーのやわらかな細腕が、俺の首に絡みつき、胸の奥へと頭を誘う。

肩から背中に流れる長髪の、さらさらとした感覚すら心地いい。
息をすれば、立ち昇る甘い色香が、肺の中いっぱいに広がっていく。
油断すれば、思考を桃色に染められてしまいかねないほどの、濃密で淫らな女の香り。
膣の中で、陽根がさらに硬く張りつめていく。
ぎゅっ、ぎゅっと締め付けられる度、少しずつ、理性が削り取られていく。
短髪キョンシーに弄られる乳首は固く勃起し、弾かれる度、甘い快楽が脳天を貫いていく。
耳は、すでに、舐め続けられてすっかりふやけてしまっている。
心が、快楽に絡めとられていく。
（――負けて、堪るかっ……）
放精を促すように、膣肉が甘く絡みついてくる。
身を任せ、最奥に思いきり精をぶちまけてしまえれば、どれほど楽だろう。
だが、歯を食い縛り、脳裏にあの日の故郷を思い描く。
惨殺された人々。筵（むしろ）をかけられた遺体。父や母の、村の皆の無念、絶望。破

壊された家々。
そして、恋人の姿を思い浮かべる。
栗色の髪をした、笑顔の可愛らしいリズ。
料理が得意だったリズ。
仄かに、淡い恋心を抱いていたリズ。
思いを告げた時、はにかみながら頷いてくれたリズ。
帰りを、いつも待ってくれていたリズ。
涙を流しながら、傷の手当てをしてくれたリズ。
愛する恋人との、いくつもの思い出を脳裏に思い描き、それを奪った相手への怒りを滾らせる。
（俺は、こんなことで、負けて、堪るかッ……!!）
気を練り上げ、沸騰するかのような情欲を無理やり抑え込み、そして強く、早く、雄々しく、キョンシーの最奥を突き上げる。
キョンシーの体ががくがくと震え、のけぞり、硬直する。
絶頂したのだ。

その瞬間、媚肉が激しく収縮し、陽根をこれまでになく強く、搾り取るように締め付けてくる。
精が、奔流となって迸るのを、俺は思い切り唇を噛んでぎりぎりのところで耐え抜く。
口角を、血が流れていく感覚とともに、キョンシーの体から陰気が流れ込み、己の陽気と溶け合うのを感じた。
横たわり、動かなくなった長髪キョンシーから、陽根を引き抜く。
愛液にまみれ、湯気を立ててさえいたが、精は漏らしていない。
硬く、硬く、そして雄々しく、屹立している。
俺は、荒い呼吸を整えながら、短髪キョンシーに向き合った。

＊＊＊

絶頂を迎え、動かなくなった短髪キョンシーから、陽根を引き抜く。
全身にびっしりと汗を浮かべながら、それでも俺は清々しいまでの達成感を

味わっていた。
「見事、と言っておこう。よく、精を漏らさず、試練を耐え抜いたの」
師に向き合い、一礼する。
「師の教えのおかげです」
「勘違いするな、レン。試練はこれで終わりではないぞ」
印を組むと、動きを止めていた二体のキョンシーが起き上がり、再び両手を前に伸ばした格好でぴょんぴょんと師の両脇まで移動し、控える。
そしてさらに、懐から反魂の札を取り出す。
今度は一枚だけだったが、油断することなく、俺は気を練り上げる。
「お願いします」
師の身から、練り上げられた膨大なまでの気が放たれるのを感じる。
反魂の札を空へと放り投げる。
札は空中にとどまり、光り輝く。
徐々に輝きを増していき、頂点に達したところから徐々に弱まっていく。
そして、再びキョンシーが現れる。

「っ……」
そのキョンシーの姿を見て、俺は目を剥いた。
生気のない灰色の肌。
黄色の道服に身を包んだ、整ったプロポーション。
そして――栗色の髪。
感情のない眼差しを俺に向けていたのは、まさに先ほどの試練の際にも、何度も脳裏に思い浮かべた――いや、あの日から一日たりとも忘れ得たことのない最愛の人の姿そのものだった。
「リズ……」
訳が分からなかった。
説明を求める視線を師に向ける。
師が浮かべていたのは、諧謔（かいぎゃく）の笑み。
これまで、一度も見たことのない表情だった。
「おまえが、弟子入りを志願してきた時には驚いたよ。あの村の人間は、全員、きっちりと殺したつもりでいたからね」

口調も、今までとまるで違う。
「どういう……」
「まだわからないのか？　レン。お前が、倒したいと願っていた相手とは、すなわち私なのさ」
驚愕の事実。
どくんっ、と大きく心臓が跳ねる。
俺は見を見開き、出てきた声はひどく掠れていた。
「っっ……なんで……」
そんな俺の様子に、師はますます諧謔の笑みを濃くする。
「なぜ、村を襲ったのか。なぜ、リズをキョンシーにしたのか。なぜ、レン、お前を弟子にしたのか。質問はこんなところでいいかい？　ふふっ、今の私は頗(すこぶ)る機嫌がいいからね。全部答えてあげるよ」
師は楽しそうに笑っている。
「まず、なぜ村を襲ったのか、だけど。キョンシーにするための死体を手に入れるためさ。リズでなくてもよかったが、あの村ではリズが一番可愛かったか

らね。ご覧の通り、素晴らしいキョンシーになったよ。次に、お前たちの村であった理由だけど、お前たちの体に流れている血が理由さ」

「血？」

「そう。お前もキョンシーについては調べたんだろう？　普通のキョンシーには意志がない。だけど、ある一族は意志あるキョンシーを作り出す秘術を代々継承してきた、と。あの村に住むお前たちは、まさにその一族の末裔なのさ。お前たちはかつて、その術を以て東の大国の皇帝に仕えていた。それが時の流れで流離し、あの村で細々と術を継承しながら生き永らえてきたという訳さ」

「っ、そんな……」

「とはいえ、お前は秘術を授けられる前に村を出てしまったから知らなかったんだろうがね」

まさか、自分の一族が道士の末裔……？

「苦労したよ。私は意志あるキョンシーを作りたかった。私を馬鹿にし、蔑んだ王国の連中に、私の力を見せつけ、私に跪かせる為にね。そのために、ありとあらゆる文献を調べたのさ。そして、意志あるキョンシーは、お前たちの一

族の死体でなければ作れないということに行き着いた。だから、襲った。他は邪魔だから殺した。これが、一つ目と二つ目の質問の答え。けど、誤算があった。リズをキョンシーにしても、意志あるキョンシーにはならなかったのさ」

師は大仰に肩を竦めてみせる。

「調べなおしてみて愕然としたよ。お前たち一族の死体をキョンシーにした後、さらに、お前たちの一族と交わり、陰陽の気を合わせなければならなかったんだ。陰陽の調和があって初めて、その身に意志が宿る、とね。でも、もう一族の男は皆殺しにしてしまった。自分の迂闊さを呪う日々さ。一人ぐらい生かしておけばよかった、とね。そんな時だった。レン、お前が私に弟子入りしてきたのは。私は歓喜に打ち震えたよ。これで、意志あるキョンシーを作り出せると。だけど、お前は自らの体に流れる血のことも知らなければ、気を練る術すら知らなかった。お前に気を練る術を身に着けてもらう為、私はお前の師となったのさ。そして今、まさにお前は道士として認められるほどの術を身に着けた。今、まさに我が大願成就の時。さあリズ、思う存分、愛しき男を犯し貪れ」

「貴様ぁぁぁっ……!!」

俺は迸る怒りに身を任せて、地を蹴った。
キョンシーの動きは遅い。
だから、三体居ようが、無視しても問題ない。
元々冒険者だった俺だ。後れを取ることはない。
武器は持っていないが、単純なことだ。
師――いや、もはや仇と言った方がいいだろう――に飛びつき、その細首をねじ切ってやる。
思った通り、長髪と短髪、二体のキョンシーの動きは緩慢だった。
だが。
思いもよらぬ俊敏さで、リズが両者の間に飛び込んでくる。
「リズっ……」
「未完成品とはいえ、私の自慢のキョンシーだよ。そこらの不良品と一緒にされたくはないね」
リズが、長い爪を突き出してくる。
並のキョンシーとは比べるべくもない速さ。

「くそっ……」
俺は何とか身を翻し、これを避ける。
少し距離を開け、リズと対峙する。
「正気に戻れ、リズ！」
「無駄無駄。今のリズは意志のない、ただのキョンシーなんだからね。喋りたいならリズに精を与えな。そうすれば、意志あるキョンシーになれる。おしゃべりの時間ぐらいくれてやるよ」
「ふざけるなっ、リズ――っ！」
リズが飛び込んでくる。
その爪撃を、寸でのところで回避する。
感情を一切感じさせない無表情のまま、リズが連撃を繰り出してくる。
「くっ、くそっ……」
俺は道服のポケットから、呪符を取り出す。
動力を込めて、呪文を唱えながら投げれば、リズを滅することもできる。
ただの、キョンシーならば。

「できるのかい？　自分の恋人を殺すことが」
仇が、笑みを浮かべている。
できないと、侮っている。
殺すわけではない。
リズはもう、死んでいるのだから。
何のために二年間、修行に明け暮れてきたというのか。
キョンシーを、それを操る道士を倒すためではなかったのか。
今、俺はその力を身に着けた。
そして、目の前には倒すべきキョンシーと、それを操る道士がいる。
何度も、脳裏に思い浮かべた光景だ。
何度も、己の術で、キョンシーを、道士を、屠る日を夢見てきた。
その瞬間が、今まさに目の前に訪れている。
そうは思っても、攻撃することができなかった。
ずっと。
毎日、夢に見ていた恋人なのだ。

攻撃できるはずがなかった。
頭ではわかっている。
もはやリズは、かつてのリズではない。
憎い仇に操られる、人外の存在。この世あらざる存在なのだ。
だが、その姿は、変わり果てたとはいえまごうことなきリズその人であった。
リズの攻撃がだんだんと鋭さを増していく。
身体を動かしたことで温まり、さらに動きが滑らかになっていっている。
懸命に避けるが、いずれ避けきれなくなる。
それは火を見るよりも明らかだ。
だから、攻撃しなければならない。
だけど、攻撃できない。
そんな攻防がしばらく続いたのち、遂にその時がやってきた。
すなわち、避けきれなかった。
わずかに頬を切り裂かれる。
なんとか距離を開ける。

頬を流れる血の感触を感じる。
と、同時に、全身から力が抜けていく。
「ぐっ……」
思わず、膝をついてしまう。
「リズの麻痺毒も、他のキョンシーとは別格さ。それに、効果は麻痺だけじゃないよ」
ほくそ笑む仇。
身体の違和感にはすぐに気づいた。
血流がいつもよりも早く、熱い。
リズが、そして憎むべき相手であるはずの仇でさえ、より美しく見えてくる。
そんな場合ではないはずなのに、陽根が勃起していく。
「媚毒。よく効くだろう？」
ゆっくりと近づいてくるリズ。
彼女が近づいてくるだけで、鼓動が早くなっていく。
「リズ、リズ！　やめろ、やめてくれ――ぅあぁっ」

懇願の声が、呆気なく喘ぎ声に変えられてしまう。
歩み寄ってきたリズが、無造作に足先で、陽根を突いたのだ。
たったそれだけ。
それだけのことで、先ほどの試練においても口に出すことのなかった嬌声が出てしまった。
肩を蹴られ、為すすべなく仰向けに転がされる。
麻痺毒が、全身に広がり、身動きが取れない。
媚毒が、全身を駆け巡り、体が、快楽を欲してしまう。
隆々と、陽根が天を差す。
俺を見下ろす、リズの目。
かつては、くるくると目まぐるしく変化し、様々な感情を宿していた瞳が。
今は、一切の感情を浮かべることなく、俺を見下ろしている。
無感情の冷たい目に見降ろされているだけで、なぜか、先端から我慢汁が溢れ出してくる。
見下ろしたまま、リズがゆっくりと靴を脱ぎ、右足を持ち上げる。

道服のスリットから、美しい脚が覗く。
艶めかしく、肉感的な脚から目が離せない。
あさましくも、期待に打ち震える陽根に、ゆっくりと右足が乗せられる。
「おぉっ……あぁっっ……」
それだけで、まるで踏みつけにされた蛙のように、びくびくと身体が震える。
少しでも気を緩めれば、今の刺激だけでも精を放出してしまいかねないほどの快楽。
俺は必死に気を練り、耐え続ける。
精を漏らしてしまえば、敗北だ。
だが、精を漏らさなければ、自分はまだ敗北してはいないのだから。
キョンシーの麻痺毒は、持続時間がそれほど長くない。
こうして耐えているうちに、やがて動けるようになる。
それまで耐える。そして、反抗の機を――。
「あぁっっ……」
少し、リズが足を前後に動かしただけで、快楽の悲鳴をあげさせられてしま

う。
柔らかな足の裏に扱かれただけで、抵抗の意思に罅(ひび)が入ってしまう。
「随分と気持ちよさそうな声を上げるね。もう諦めてしまうのかい？」
「ふざ、けるな。誰が――あおぉぉっ……」
嘲笑交じりの仇の言葉に、敵愾心を滾らせようとするが、リズが少し足を動かす速度を速めるだけで、無様な喘ぎ声に取って代わられてしまう。
「リズ、リズぅぅぅ……」
精巣から、精が込み上げてくる。
止められない。このままでは出てしまう。
その瞬間、リズが足を上げた。
波のように、絶頂感が引いていく。
「あ……？」
射精を覚悟していた俺は、惑乱しながらリズを見上げる。
変わらぬ、冷たい無の目線。
「ふふっ、どうしたんだい、その顔。まさか射精したかったのかね？」

嘲笑する仇の言葉に、かぁっと全身が熱くなる。
「ば、馬鹿を言うなっ、誰が――あぁぁっっ!!」
反論の言葉もそこまで。
再び、リズの足が陽根を踏みしだく。
ぐにぐにと容赦のない動き。
それは、愛撫などでは決してない。
文字通りの、蹂躙。
柔らかな足裏で行われる、暴虐だった。
瞬く間に、絶頂の波が押し寄せてくる。
だが、最後、波頭が砕ける一瞬前に、リズが足を放してしまう。
「あぁっっ……」
口から、抑えようとも抑えきれぬ慨嘆の声が漏れる。
反論のしようもなく、自覚させられてしまう。
己が、浅ましくも絶頂を、快楽を、リズの足を白く汚すことを欲してしまっ

ているということを。
目に涙が滲む。
心の、罅が広がっていく。
今度は、親指だけで裏筋をなぞり上げられ、亀頭をくるくると弄られる。
あふれ出る我慢汁が潤滑油となって、純粋な快楽だけが齎(もたら)される。
だが、やはり、射精の寸前に足が離れていってしまう。
「あぁあっ、気持ちいいっ、気持ちいいよぉっ、リズ……」
耐えようともせず、快楽の喘ぎを発する。
だが、返ってくるのはいっそ清々しいまでの無の眼差し。
その眼差しが、さらに心を、体を滾らせる。
そして、再び強く踏み躙られる。
「あ、はぁぁっ、んあぁっ……」
「くふふっ、無表情に踏まれて喘ぎまくるって、とんだ情けない男だね。もう放精することしか考えられないんだろう？　そんなに出したいなら、懇願してみな」

全身を毒に侵され、身動きもできないまま、かつての恋人に無様に懇願する。
屈辱だった。
だが、今や、その屈辱すら、甘美でさえあった。
「いかせて……リズぅ……」
心が、快楽の前に折れてしまった。
リズの右足が柔らかく乗せられ、ゆっくりと陽根を扱き上げていく。
美しい足が、俺の我慢汁で汚されていく。
言い知れぬ興奮に、体が打ち震える。
再び、絶頂の波が押し寄せてくる。
高みへと、体が持ち上げられていく。
この高みから墜ちてしまえば、きっと自分は――。
そして――波頭が崩れ落ちる。
その瞬間、無情にも再びリズが足を上げる。
「あぁっ……ぅぅっぅ」
絶頂を取り上げられて、涙が頬を伝っていく。

「面白かったよ、レン」
仇があざ笑う。
「だけど、足で射精させるためにおまえをここまで育ててきた訳じゃないんだ」
「っ……」
ぼろぼろにされ、屈服した心に、仇の言葉が塩を塗り込まれているかのように沁みる。
「ふふっ。さあリズ。お遊びはここまでだよ」
リズが、陽根から足を下ろし、俺の腰を跨ぐようにして立つ。
道服をめくると、下着をつけていない陰唇があらわになる。
「り、リズ……」
俺は視線を逸らすこともできなかった。
ただ、生唾を飲み込む。
淫らな姿が、神々しくさえ感じられる。
リズがゆっくりと腰を下ろす。
くにゅ、と柔らかな肉に触れた感触の、次の瞬間には、ずっぽりと陽根はリ

ズの陰唇に根元まで、深々と飲み込まれていた。

ゴースト

ゴースト

危険度：B～C　　出現場所：古民家、古屋敷等
知　能：普通～低い　　特殊能力：憑依、エナジードレイン

人の肉体が死した時、ほとんどの魂は朽ちる肉体と共に現世を去るが、強い未練を抱いたまま死した魂は、霊体として現世に留まりさ迷うこととなり、これをゴーストと呼ぶ。

肉体を持たぬ彼らはおぼろげな幻影の姿で現れたり、意識の失った人間に憑依したりすることで、未練を叶えようとする、儚い存在だ。もし、不慮の事故で亡くなった善良なゴーストと出会ったなら、その願いを叶えてやるのも、肉体を持つ生者の役目だろう。

だが、魂を現世に留まらせる未練は多くの場合、権力、金銭、憎悪といった負の感情である。しかも、霊体である時間が長引くにつれ、記憶や理性が削ぎ落され、負の感情だけが純化されていくため、彼らを穏便に除霊することは難

しい。
肉体を持たない不安定な存在の彼らは、人々の感情や生気を吸収したり、ゴーストという一個体になれない小さな魂と結合したりし、時が経つにつれ危険な存在になってゆく。
未練が強い魂ほど強力な霊になるが、中には天変地異を自在に操るほど強大化し、亜神の名で呼ばれた、ゴーストの例も記録されている。
ゴーストは肉体を持たないため、一切の物理攻撃を受け付けない。
祝福や魔法が込められた武器なら効果はあるが、万が一にも彼らの冷たい手に触られれば、生気を吸われ昏睡、ひどい場合には知識、記憶、意思といった、人を構成するモノそのものを奪われかねない。
ゴーストに立ち向かうには、敬虔な聖職者の協力が不可欠だ。
神の奇跡を祈り、魂を霧散させてしまうのが一番である。
残された者の思念によって魂が現世に引き寄せられ、ゴーストとなる場合もある。ゴーストといえ先立たれた相手と再会でき、お互いが幸せならば、除霊などしなくていいと思うかもしれない。

しかし、歩みを止めた生者は死者と変わらないし、ゴーストの救われる場所も現世には存在しない。私たちがしてやれることは、行き場のない魂を現世の柵（しがらみ）から解き放ってやること、ただ一つである。

乱暴かもしれないが、神の寵愛は悪しき魂にも等しく与えられる。

やがて罪を洗い流し、天界の門をくぐる時が来るのを祈ろうではないか。

熟肉の虜

文　　トロスタニ
挿絵　鈴 輝　　桜

幻想世界魔物大全

登場人物紹介

エミール・ラウラ
アントニウス神学校の学生。育った環境のせいで、裕福な貴族達に強い反発心を抱いているが、それが最も権威のある神学校で、首席を取る原動力となっている。なお、神学校とは神の教えを広め、信仰に篤い若者達を見出すため、聖アントニウスによって各地に建設された教育機関である。神の教えが一般化した現在では、箔付けの為に通い、神の奇跡すら請えぬ者もいる。

エリザベス・アインレイス（ベティ）
エミールの幼馴染。男勝りなお転婆娘で、口より手が先に出る性格。色情霊に取り憑かれた母親を助けるため、エミールを頼る。

ロキシーヌ・アインレイス
ロキシーヌに取り憑いた悪霊。永遠に満たされぬ情欲を晴らすためにロキシーヌの体を弄ぶ。

色情霊
ロキシーヌに取り憑いた悪霊。永遠に満たされぬ情欲を晴らすためにロキシーヌの体を弄ぶ。

シスター・クレア
ジルモの小さな教会を一人で切り盛りする修道女。エミールが神を見出すきっかけを作った。

企画・製作　白森書房 トロスタニ

本作品内の画像・テキスト等全てのデータに対して、無断転載・複製・改竄・第三者に譲渡することを固く禁じます。